

「延世大学派遣参加報告書」

京都大学経済学部 (氏名) 井上颯斗

①学習成果

今回のプログラムで一番成長したと感じるのはスピーキング力だ。第二外国語で韓国語を選択していたため基本的な文法はある程度理解していた。そのためクラス分けテストでは一番下のクラスではなく下から二番目のクラスに分けられた。しかし最初の授業で自分と自分以外の学生には圧倒的なスピーキング力の差があることを実感し、初日はその不甲斐なさから貝のように口を閉ざしてしまいそうになった。二日目からは自分のスピーキング力にあったレベルのクラスに変更してもらった。初日のことが少しトラウマになりつつあったが、新しいクラスではみんな自分と同じレベルだったのでストレスもなく積極的に発言することができ、楽しく授業を受けることができた。また授業外でも自分が思っていることを韓国語でどのように言うのか調べる時間を増やし、徐々に言いたいことを言えるようになった。もちろん単語もまだ全然覚えていないので流暢に話せるとは到底言い難いレベルではあるが、全く言いたいことが言えなかったプログラム前に比べるとかなり成長したように思う。

②海外での経験

オンラインでのプログラムであったため、コロナ前と比べればもちろん韓国語に触れる時間は少なかっただろう。実際自分もこのプログラムに応募する前は「オンラインだから」という理由で応募するのを躊躇っていた。しかし、実際に授業を受けてみると授業では先生や他の学生との交流が多くとても有意義な時間を過ごすことができ、今となってはこのプログラムに参加して良かったと思う。本来であれば授業の後、実際に韓国の街に出て観光や対面での交流をし、もっと充実した日々を送れたはずで、その点においては残念としか言いようがないが、それらはコロナが収束してからの楽しみとしてとっておこうと思う。

また今回参加した授業は韓国語を学ぶ外国人向けに行われている授業であったため受講者は様々な国の人がいた。(実際自分のクラスには中国、タイ、インドネシア、ニュージーランド、イタリア、ノルウェーの学生がいて日本人は自分だけでした。) そうした韓国語でも母国語でも言いたいことを伝えられない環境の中では、学生同士のコミュニケーションは韓国語と同じくらいの割合で英語で行われており、改めて英語がリング・フランカであることを認識した。最近は英語が話せるようになりたいという思いよりも韓国語を話せるようになりたいという思いの方が強かったが、海外の人と関わる上ではやはり英語が不可欠だと身に染みて実感した。

③プログラム内容

まず授業が始まる前にテストを受け受講者はいくつかのレベルに分けられそれぞれのレベルにあったクラスで授業を受けた。授業は50分の授業が1日4回行われ、最初の2限が文法、残りの2限がリスニング、スピーキングの授業だった。授業は基本韓国語で行われるので不安はあったが適宜英語や日本語でも説明されるので理解に困るということはない。むしろネイティブスピーカーの授業を受けてリアルな韓国語を聞くことで自分のスピーキング力やリスニング力の向上につながったと思う。

④進路への影響について

自分の進路について明確に決まっているわけではないので、今回のプログラムが具体的に自分の進路にどのような影響を与えたかは分からない。しかし授業やそれ以外の時間で様々な国からきたクラスメイトと関わる中で従来よりもグローバルに物事を見ることができるようになり、将来の自分の可能性も広がったように思う。